

1 4	岡 崎	矢作北中学校	イシタニ リョウイチ 氏名 石谷 遼一
分科会番号	1 8	分科会名	情報化社会の教育

1 研究テーマ

A I と人間の「感情」の違いを考える情報モラル授業の実践
～中学2年生 A I のやさしい返事と人間の共感を比較して～

2 研究概要

(1). 主題設定の理由

近年、対話型生成A I（以下、A I）は急速に普及し、学校教育においても「使うか使わないか」を議論する段階から、「どのように安全に適切に活用するか」を考える段階へ移ってきている。

また、青少年の利用実態を見ても、A Iはすでに身近な存在となっている。総務省による「2025年度 青少年のインターネット・リテラシー指標等に係る調査」では、A Iについて「使ったことはない」と答えた者は、中学生は15.9%、高校生は12.6%だった。学研教育総合研究所による白書シリーズ2025「中学生の日常生活・学習に関する調査」では、A Iを「使っている」人の割合は、中学生は43.2%、高校生は73.7%だった。同調査によると、利用目的の上位は「情報収集のサポート」「宿題・勉強の手助け」であった。さらに高校生では3位に「悩み相談・カウンセリング」が挙がっており、A Iが学習支援の道具であるだけでなく、感情面に関わる相談相手としても使われ始めていることが分かる。A Iは、やさしい言葉や共感的な表現を返すことができるため、生徒にとって「自分をわかってくれる存在」のように感じられる場面も生まれていることが分かる。

調査によって数字に違いはあるが、中高生がすでに何かしらの形でA Iを利用しており、学習のみならず感情面でも中高生にとってA Iが身近な存在となっていることが分かる。しかし、A Iは人間のように感情や身体感覚、生活経験をもって相手に寄り添っているわけではない。そこで、「A Iのやさしい返事」と「人間の共感」との違いを考えることによって、生徒がA Iを利用したり、人に相談したりする場面を自ら適切に選択できるようにしたいと考えた。

(2). 生徒の実態について

本学級の生徒でアンケートに回答した31人のうち、生成A Iを「よく使う」11人（35.5%）、「時々使う」15人（48.4%）で、合わせて26人（83.9%）が日常的に利用しており、総務省の調査と同様の傾向が見られる。利用目的の上位も「調べ物」27人（87.1%）、「宿題や勉強」12人（38.7%）であり、3位には「暇つぶしや会話」9人（29.0%）だった。また、「悩みや気持ちの相談」にも6人（19.4%）の生徒が利用している。これらのことから、感情面にかかわる相談相手として利用している生徒がおり、学研教育総合研究所の調査における高校生に近い傾向が見られ始めている。また、「A Iと話すと気持ちが楽になるか」については、「よくある」4人（12.9%）、「少しある」6人（19.4%）と、一定の心の軽さを感じており、「A Iが自分の気持ちをわかってくれていると感じるか」については、「強く感じる」1人（3.2%）、「少し感じる」10人（32.3%）で、少なくない生徒が「わかってくれる感じ」をもっている。

(3). 目指す生徒像について

A I と人間の、返答や感情の違いを理解し、人間と A I それぞれのよさと限界を踏まえて適切に利活用して
いこうとする生徒

(4). 研究の仮説と手だて

目指す生徒像に迫るために、次の仮説を立てて検証することにした。

仮説 A I の共感的な返答と人の感情の違いを、具体的な場面や例で比較して考えたり、言語化したりする場
面を設定すれば、A I と人間の感情の違いを理解し、適切な関わり方を考えることができるだろう。

手だて① A I の共感的な返答と人の感情の違いに気付かせるために、A I の基本的な仕組みについて学んだ
上で、両者の返答の感じ方を比較する場を設定する。

手だて② A I との適切な関わり方を考えさせるために、人間と A I の特性について言語化したり、どちらに
相談するとよいか評価したりする場面を設定する。

単元計画（3時間完了）

学 習 課 題	学 習 活 動	時間
私たちと A I はどのよう に関わっているだろうか	全校一斉の情報モラル授業（授業者：矢作北中学校学習情報主任） ・生成 A I の基本的な仕組みや、一般的なルールと法律を知る。	1
A I と人間の「感情」① A I も「やさしさ」をも っているのだろうか	・事前アンケートから、感情面で A I を利用する人がいることを知る。 ・悩みを相談した時の返答例を通して、「人間の返答」と「A I の返答」 の感じ方を比較する。 ・「やさしい」返事と「気持ちのこもった」返事の違いを考える。 ・A I も人間と同じようなやさしさをもっているのか考える。	1
A I と人間の「感情」② 人間の「やさしさ」には あって、A I の「やさし さ」にはまだないものつ てなんだろう	・「やさしさ」とは何か考える。 ・人間の「やさしさ」にはあって、A I の「やさしさ」にはないものを 考える。 ・相談内容別に、だれに相談するのが適切か、これからの A I との付き 合い方を考える。 ・本単元全体の学習を振り返る。	2

3 抽出生徒について（事前アンケートの結果から）

生徒 A …日常生活でも A I をよく使う生徒である。A I には勉強や調べ物以外にも、「暇つぶしや会話を楽し
むとき」「悩みや気持ちを相談するとき」にも利用している。悩みがある時の最初の相談相手は「家
族」とする一方で、A I と話すと気持ちが楽になることが「よくある」と感じ、A I は自分の気持ち
を分かってくれていると「少し感じている」。これからの生活の中で A I を頼ることが多くなりそう
な生徒 A が、A I との適切な心理的な距離感を考え、活用の仕方を考えていってほしい。

生徒 B …日常生活でも A I をよく使う生徒である。「悩みや気持ちを相談するとき」を利用目的の一番に選択
しており、悩みがある時の最初の相談相手は「A I」と答えるほど、A I を感情面で積極的に利用し
ている。しかし、A I は自分の気持ちを分かってくれているとは「あまり感じていない」。感情面で
の利用の多い生徒 B が、A I と人間の違いを考えることで、これからの A I との関わり方を考えてい
ってほしい。

4 実践の様子

第1時 私たちとA Iはどのように関わっているだろうか（全校一斉授業：授業者 小出達也教諭）

本校学習情報主任の小出達也教諭による、全校一斉の情報モラル授業として、A Iの基本的な知識や利用時のルールを学習した。この授業で、「入力されたプロンプトに応じて、A Iは膨大なデータから予測した結果を出力している」というおおまかな仕組みを生徒たちは理解した。小出教諭の授業では、『むかしむかし』という言葉の後には『あるところに』が続く可能性が高い。この可能性の高い答えを、学習内容から予測して返答しているのがA I」という説明があった。A Iが大量のデータからもっともらしい予測をして、文章を生成しているという仕組みを知ることは、A Iの感情について考察していくにあたって重要な基礎理解となる。

第2時 A Iも「やさしさ」をもっているのだろうか

導入では、事前アンケートをもとに、本学級のA I利用の状況を生徒に共有した。「勉強以外も相談したことがある」52%、「A Iと話すのが気持ちよくなる」32%、「A Iは自分の気持ちをわかってくれている」35%という結果については、生徒Bをはじめとして納得して頷く生徒もいれば、「そんなに！」と驚く生徒もあり、A Iの利用についてはまさに感情面での利用については両者入り乱れている様子が反応からも伺えた。しかし、「A Iは友達のような存在になりえるか」肯定派16%・否定派77%という結果については「たしかに友達とは違う気がするんだよね」という意見が出て、それに同意するつぶやきも後に続いた。このように、生徒の実態は「A Iは便利で、勉強や調べ物以外にも相談に使うこともある」という一方で、「人間の友達とは違う存在」と捉えている生徒が多いことが全員で共有することができた。そこで教師は「友達にはなりえないと思っているけど、気持ちの面で頼りにして気持ちよくなる人がいるのも事実だね。どうしてだろう」と切り返し、本時の課題である「A Iも『やさしさ』をもっているのだろうか」へと繋げた。

次に、3つの場面における返答例を生徒たちは比較した。

場面①テストで思ったよりも悪い点を取って落ち込んでいる時	
返答A	それはつらかったよね。がんばったのに成果が出ないと、しんどいよね。よかったら今回うまくいかなかったところと一緒に整理してみよう。
返答B	そうだったの。昨日もがんばってたの知ってるから、余計くやしいよね。一緒に復習しよう。
返答C	次があるでしょ。
場面②友達とケンカして、もやもやしている時	
返答D	仲がいい相手ほど、ぶつかった後って、苦しいよね。よかったら、何があったか順番に教えて。
返答E	あー、それはしんどいね。昨日から元気なかったし、気になった。二人はいつも仲がいいから、もっとつらいよね。
返答F	そのうち仲直りできるでしょ。
場面③グループに入りにくくて、一人浮いている感じがする時	
返答G	それはさみしかったよね。自分だけ置いて行かれたように感じると苦しいよね。どんなときにそう感じたの？
返答H	今日も一人で移動してたよね。見てて気になった。今度の移動教室、私のところにおいでよ。一緒に移動しよう。
返答I	気にしすぎじゃない？

返答A,D,Gは、一般的に「A I的な返答」と感じやすい例として設定している。つらさや苦しさへの共感的な反応から、出来事についての追加の情報を収集し、整理する傾向が強い返答であり、A Iとのやり取りでよく見かける返答であり、実際にA Iが返答してきた文書を基に作成した。返答B,E,Hは、一般的に「自分のことを知っている、人間的な返答」と感じやすい例として設定している。共感的な反応を、相談者の置かれている具体的な状況を「見た」者としての返答である。返答C,F,Iは、一般的に「人間的ではあるが温かみの感じにくい返答」と感じやすい例として設定している。共感的な反応はなく、短文で素っ気なく感じる返答として設定している。しかし、今回は「やさしさという感情は受け手側の受け取り方によってその有無や程度が決まる」ことも生徒には気付いて欲しいと考えたので、いずれも生徒には「A Iの返答」「人間の返答」とは明示せずに提示することとした。

これらの返答について、どんな印象を感じるか考えさせた。生徒A,Bともに時間の制約上、記述の済んでいない箇所がある。

資料①は、生徒Aの記述である。生徒Aは返答A,B,D,Eについて、優しさを感じており、「嬉しい」「頼りになる」と感じている。一方で資料Cは「次があるのは間違っていないけど話聞いて欲しい。相談する相手間違えた」と感じている。

資料②は、生徒Bの記述である。返答A,B,D,G,Hには好意的な印象を抱いていることが分かる。返答F,Iには、相談したことを後悔するような記述が見られる。しかし、返答Cについては「納得。勇気をもらえる」と感じている。

場面1 テストで思ったよりも悪い点を取って落ち込んでいる ※テストの点数が悪かったよりも落ち込んでいた	場面2 友達とケンカして、もやもやしている 友達とケンカしちゃった。ああもうもやもやする！	場面3 グループに入りにくくて、一人ぼっちの感じがする 相談したと聞いていた子たちのグループに入りたかったけど、なかなか入れなくて寂しい感じがする。
A それはよかったね。がんばったのに結果が合わないし、しんどいよね。よかったら、今更さくくいなかったところを一緒に整理してみよう。	D 仲がいい相手ほど、ぶつかった後って、悪いよね。よかったら、何があったか順番に教えて。	G それはさあよかったね。自分だけ置いていかれるように感じると悪いよね。どんなときにそう感じたの？
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ
B そうだったの。昨日も頑張ってたの知ってるから、絶対やしいよね。一緒に整理しよう。	E あー、それはしんどいね。昨日から元気ななかったし、寂しかった。ふたりはいつも仲がいいから、もっとつらいよね。	H 今日ひとりりで相談してたよね。見てて寂しかった。今更の移動教室、私のところに来てよ。一緒に移動しよう。
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ
C 次があるでしょ。	F そのうち仲直りできるでしょ。	I 寂しすぎじゃない？
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ

資料① 生徒Aの各返答への印象

場面1 テストで思ったよりも悪い点を取って落ち込んでいる ※テストの点数が悪かったよりも落ち込んでいた	場面2 友達とケンカして、もやもやしている 友達とケンカしちゃった。ああもうもやもやする！	場面3 グループに入りにくくて、一人ぼっちの感じがする 相談したと聞いていた子たちのグループに入りたかったけど、なかなか入れなくて寂しい感じがする。
A それはよかったね。がんばったのに結果が合わないし、しんどいよね。よかったら、今更さくくいなかったところを一緒に整理してみよう。	D 仲がいい相手ほど、ぶつかった後って、悪いよね。よかったら、何があったか順番に教えて。	G それはさあよかったね。自分だけ置いていかれるように感じると悪いよね。どんなときにそう感じたの？
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ
B そうだったの。昨日も頑張ってたの知ってるから、絶対やしいよね。一緒に整理しよう。	E あー、それはしんどいね。昨日から元気ななかったし、寂しかった。ふたりはいつも仲がいいから、もっとつらいよね。	H 今日ひとりりで相談してたよね。見てて寂しかった。今更の移動教室、私のところに来てよ。一緒に移動しよう。
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ
C 次があるでしょ。	F そのうち仲直りできるでしょ。	I 寂しすぎじゃない？
読者の感想はここへ	読者の感想はここへ	読者の感想はここへ

資料② 生徒Bの各返答への印象

次に、感じ方を「安心する返事」「そっけない返事」「人間っぽい返事」「A I っぽい返事」に分類する活動を行った。

生徒Aは返答A,D,G,Hに「安心」を感じている。特に、生徒Aは「A I 的な返答」である

返答A,D,Gに安心感を得ている。「人間的な返答」は返答Hだけであった。さらに、返答A,D,Gは「A I っぽい返事」に分類しており、事前アンケートからもわかったように、A I と判断しながらも、A I の共感的な返答について好意的な印象を持っている。

生徒Bは返答A,C,D,G,Hに「安心」を感じている。生徒Bは「A I 的な返答」である返答A,D,Gに加え、「人間的な返答」から短文の返答C、長文の返答Hも選択している。生徒Bも生徒Aと同様に、返答A,D,Gは「A I っぽい返事」に分類しており、A I と判断しながらも、A I の共感的な返答について好意的な印象を持っている。

一方で、生徒A,Bのように多くの生徒が返答C,F,Iは「そっけない」「冷たい」と感じたようである。しかし、生徒A,Bをはじめとして、A I の利用に慣れている生徒は「A I っぽくはない」とも授業でつぶやいており、「A I =冷たい」ではなく、むしろ人間の方が冷たい対応をとることを全員で再確認することができた。

そこで、「人間っぽい返事とA I っぽい返事は何が違う？」という発問をし、各自の考えをまとめさせたところで、チーム内での意見交換の時間を取った。

それぞれの返事の特徴ごとに分類してみよう				
安心する返事	G	D	H	A
そっけない返事	C	F	I	
人間っぽい返事	E	B	H	I
A I っぽい返事	D	A	G	

資料③ 生徒Aによる分類

それぞれの返事の特徴ごとに分類してみよう				
安心する返事	H	C	A	G
そっけない返事	C	F	I	
人間っぽい返事	H	B	E	I
A I っぽい返事	G	D	A	

資料④ 生徒Bによる分類

生徒Aと同チームの生徒Cは「人間っぽい返事は、自分の気持ちに寄り添ってくれたり、相談にのってくれるけど、AIっぽい返事は、(細かいことを)相談してないのに自分の気持ちを分かりすぎている」という意見を、生徒Aに伝えた。その結果、授業の振り返りでは、「AIは優しさがあるとはいえ優しすぎるからたくさん共感してくれて、もし自分が悪いことをしていたとしても気づかないことがあるかもしれないからそれが本当の優しさ

ではないんじゃないかなと思いました」(※1)とまとめている。事前アンケートでAIの共感について好意的だった生徒Aが、その限界に気付いた場面であると捉えることができる。(資料⑤)

生徒Bは「AIは課題解決のために相談に乗り、人間は寄り添いを重視している」と考えた。一方で、授業の振り返りでは、AIは「優しさをもっている」と考えており、AIの共感的な反応を人間の感情的な「やさしさ」と混同している様子が見られた。(資料⑥)

他の生徒についても、AIはやさしさをもつ、もたないの意見が入り乱れており、次時の課題となった。

第3時 人間の「やさしさ」にはあって、AIの「やさしさ」にはまだないものってなんだろう

導入では、前時に曖昧だった「やさしさ」について、全員で共通理解を図った。本授業において「やさしさ」とは「どんなことがあっても励ましてくれること」「思いやりの気持ち」「寄り添ったり、時には怒ったり、相手を思って行動すること」というようなものであると、生徒の意見をもとに定義した。また、前時の授業で返答例が「人間」「AI」どちらのものだったかをそれぞれ生徒たちに明かした。AIの返答に対しても「やさしさ」を感じる人が多くいることを踏まえて、「人間の『やさしさ』にはあって、AIの「やさしさ」にはまだないものはなにか」を考えさせた。

生徒Aは、人間の「やさしさ」には「自分の経験」があると考えた。AIの共感に好意的だった生徒Aが、人間ならではの価値として経験に着目するようになった。(資料⑦)

生徒Bは「思いやりの気持ちや気遣いの気持ち。相手を思いやったり、相手の気持ちに寄り添う、同情、相手の気持ちを考える力」があると考えた。一方で、AIの「やさしさ」にはまだないものとして「思いやり。感情」と考え、だからこそ「解決策やアドバイス重視になる」と結論づけた。(資料⑧)

考えたことをチームで共有した後に、人間とAIのそれぞれの「やさしさ」の特徴について、学級で意見交換を行った。第1時で学習したように、生徒たちは「AIの返答はネットなどの膨大なデータを収集・検索して、整理して出力したものであり、全体的に相談者を肯定する傾向がある」などの意見が出た。一方で、「人間は自分の見たことや聞いたこと、経験を踏まえながら寄り添う傾向がある」という意見が出た。

さらに、「AIにはできなくて、人間にはできる「やさしさ」とはなんだろう」と発問すると、「自分を犠牲にしてでも相手を守ること」「自分の経験で話をすること。AIは知識があっても経験はしていない」「相手になったつもりで相談に乗ること」という意見が挙がった。さらに「こうしたところがAIにはできない、人としての厚みがあるということだと思う」と答えた生徒もいた。

2. (人間っぽい返事、AIっぽい返事なにが違う?)

人間は普段の自分をちゃんと知った状態で話してくれる。AIはなにがあったか1から説明して自分がどうやって行動してたかとか最初は知らないまま話を聞いてくれる。

3. 授業を振り返って
・AIは「やさしさ」をもっているのだろうか
・今後考えていきたいこと

AIは優しさがあるとは言え優しすぎるからたくさん共感してくれてもし自分が悪いことをしていたとしても気づかないことがあるかもしれないからそれが本当の優しさではないんじゃないかなと思いました。※1
今後もAIを使う機会は多いと思うけど今回の授業で習ったことを生かして上手にAIを使えるようにしたいです。

資料⑤ 生徒Aの第2時の記述

2. (人間っぽい返事とAIっぽい返事何が違う?)

AIは多分悩みを置かれたら解決させようとしていそうだから、色々聞いてくれることが多い気がする。でも、人間は解決より相談されてる相談にのってあげるというふうを考えそうだから人間っぽい返事では疑問系の返事が少なく、AIっぽい返事では疑問系の返事が多い。 ※2

3. 授業を振り返って
・AIは「やさしさ」をもっているのだろうか
・今後考えていきたいこと

優しさは持っているとおもう、それに、的確なことを言うってくれたり、人間より頭がいい?と思うので、頼りになるし、すぐに返事をくれるので、すごく役立つと思います。でも間違ったことも言う時もあるので、そこだけ注意してうまくつかえば、私たちの生活にすごく役に立つ存在になると思います。

資料⑥ 生徒Bの第2時の記述

人間にあるもの

**自分の経験
から意見を
言うこと**

資料⑦ 生徒Aの第3時の記述1

人間にあるもの

思いやりの気持ちや気遣いをする気持ち。相手を思いやったり、相手の気持ちに寄り添う、同情、相手の気持ちを考える力は人間にはあると思う。

資料⑧ 生徒Bの第3時の記述1

最後に、場面ごとに誰に相談するか、これからA Iをどう利用していきたいか、まとめの活動を行った。

生徒Aは「ちょっとした気持ちの整理」はA I、「深い悩み」は人間、「苦しい気持ち」はどちらもありと答えた。基本的には簡単な相談でA Iを活用したいという思いを持つようになった。(資料⑨)

生徒Bは「ちょっとした気持ちの整理」は人、「深い悩み」はどちらもあり、「苦しい気持ち」はどちらもありと答えた。特に生徒Bは、A Iの利点として「気を遣わなくてもいい」ことを挙げている。生徒Bは事前アンケートでも人に相談するとき「相手にどう思われるか」をととても気にしていたが、その傾向自体には変化はない。しかし、「どちらもあり」と答えていることから相談相手の選択肢に「人」が入るようになり、A Iにだけ頼るのではなく、人に頼る場面も必要であると考えられるようになる変容が見られた。(資料⑩)

こんなときはどうしたらいいだろう

相談したいこと	向いている相談相手	理由
勉強の質問	どちらもあり	AIもすぐに答えられてわかりやすいし、人に聞いてもわかりやすいから
ちょっとした気持ちの整理	AIが向いている	あまり深刻じゃなかったらすぐに解決したいから
深い悩み	人が向いている	AIは自分のことをよくわかっていなくて自分が悩んでいる様子に相談したいから
すぐに返事が欲しいこと	AIが向いている	とにかく早く情報を知りたいから
苦しい気持ち	どちらもあり	人に相談するのもしんどいけど言葉を吐くのが簡単じゃない人はいないし、AIに相談できるから

AIは個人情報や人が嫌な気持ちになる使い方は避けてちょっとした相談相手になってもらったり勉強とかすぐに知りたいものなどを聞くようにする。
人は真の友情に喧嘩は必要かもしれないけど悪口を言ったり貶したりするようなことはしない。常に相手の気持ちを考えて行動、発言する。

資料⑨ 生徒Aの第3時の記述Ⅱ

こんなときはどうしたらいいだろう

相談したいこと	向いている相談相手	理由
勉強の質問	人が向いている	勉強は間違ったら分からなかったら人に聞きたいから
ちょっとした気持ちの整理	人が向いている	ちょっとした悩みくらいなら、友達や家族に相談したらすぐ解決できる気がするから
深い悩み	どちらもあり	人にどう思われるのかわからなくて怖いから、でもたまには人に話さないと
すぐに返事が欲しいこと	AIが向いている	多分人より早く答えをくれると思ったから
苦しい気持ち	どちらもあり	なんでや吐けるし話を聞かなくてもいいし、聞かなくても、言葉を吐けてもいいから、でも人に話したいし、聞いてほしいし、でも人に話さないと

AIは楽だけど、たまに間違ったことを言ったりする。でも気を遣ったりしなくてもいいし、なんでも吐けるからそれはいいところだと思うし、人と聞けるのが苦手な人や話するのが苦手な人やそう言う時はすごく便利だと思うから使う時を考えて使えばきっとこれからも便利なものになっていくと思う。人にはAIにはひつようないかもしれないけど、思いやりや気遣い、相手を思う気持ちを大切にしたい。

資料⑩ 生徒Bの第3時の記述Ⅱ

5 手だての検証

手だて① A Iの共感的な返答と人の感情の違いを気付かせるために、A Iの基本的な仕組みについて学んだ上で、両者の返答の感じ方を比較する場を設定する。

有効であったと考える。実践の様子でも触れたように、生徒Aの第2時の記述(※1)にある「(A Iのやさしさは)本当の優しさではないんじゃないかな」や、生徒Bの第2時の記述(※2)にある「A Iは多分悩みを言われたら解決させようとしていそう」「人間は解決より…相談にのってあげる」「人間っぽい返事は疑問形が多く、A Iっぽい返事では疑問形の返事が多い」から分かるように、A Iと人の感情や悩み相談への対応の仕方には違いがあり、A Iは「やさしさ」と感じられるような共感的な表現をすることはできるが、人間の「やさしさ」とは違い、経験や感情を基盤としているわけではないことに気付くことができた。

手だて② A Iとの適切な関わり方を考えさせるために、人間とA Iの特性について言語化したり、どちらに相談するとよいか評価したりする場面を設定する。

有効であった。生徒Aの資料⑦「経験から意見を言う」や資料⑨の相談相手の選択、生徒Bの資料⑧「思いやりの気持ちの有無」や資料⑩の相談相手の選択から、生徒はA Iと人間の感情の違いを言語化することで、これまで無自覚的に感じていた両者の特性を整理して認識し、特性に応じた関わり方を選択することができた。

6 おわりに

A Iは私たちの生活ですでに身近なものとなっており、生徒たちには「あたりまえ」に存在しているツールである。本実践は「人」「A I」「感情」について思考していく内容となっており、中学2年生には難しいものであったかもしれない。「A Iは感情をもつのか」という問いは、近年様々な立場から議論されている。

一般的には「内側で本当に『感じているか』どうか」や「身体や生存と結びついた経験があるかどうか」が、人間とA Iの大きな違いであると考えられている。本実践でも、そういった部分に着目した生徒の言動や気づきが見られるなど、人間とは何か、感情とは何かといった哲学的な気づきや視点が生徒から見られた。しかし、A Iと感情について考える実践は多くはなく、まだまだ研究段階である。これからの情報リテラシー教育で避けては通れないものであると考える。生徒たちはA Iが便利なものであると考えている。そんな生徒とA Iが適切な心理的な距離を保ちつつ、生活に役立てていけるような実践を、これからも考えていきたい。